

「迷解ことわざ辞典」

武藤 政春

江戸時代の日本では、笑いの文化が大いに花開いた。

十返舎一九（著作・東海道中膝栗毛など）や式亭三馬（著作・浮世床など）らによる滑稽本の出版や、都々逸、川柳、地口（ジゲチ）の流行などである。

地口とは諺や成句をもじって遊ぶ駄洒落であり「着たきり雀＝舌切雀」「下戸に御飯＝猫に小判」「裾から出た真綿＝嘘から出たまこと」などの名作が残されている。

私も、そんな地口を捻ってみた。そして、元になった諺や成句はカッコで示したので見比べていただけると幸いである。

〈ア行〉

①杏より梅が安し（案ずるより産むが易し）

杏と梅は似たような果実であるが、杏の方が見映えが良く少し高価である。スーパーに杏と梅が並んで売られていると、人は見映えの良い杏の方を買い求めがちである。しかし実利的には大して差はない。したがって、何も高い物を買う必要はなく梅で十分である。

「杏より梅が安し」という諺は、家計の贅沢を戒める時に使われる。

②エクボもアバタ（あばたもえくぼ）

恋は盲目と言われる。恋をしている時には相手の容姿も性格も、全てが好ましく感じられ「アバタもエクボ」に見える。

やがて、めでたく恋が成就して結婚し時が経つと、次第に目が醒めてくる。そうなるのと、今度は相手の全てが欠点に見え始めてしまう。

結婚前は「我を張らない柔軟な好ましい性格」と思っていたのが、結婚後は「決断力が無いだけ」なんだと気がつく。また結婚前は「小さな事にはこだわらない大らかな性格」だと思っていたのが、結婚後は「単にルーズなだけ」なんだと気がついてしまう。

このように、結婚後に相手の欠点がやたら目に付くようになる現象を「エクボもアバタ」という。そんな状況に陥らないためには、結婚後は極力、相手をつぶさに観察しないことである。

③親が西向きゃ子は東（犬が西向きゃ尾は東）

子供も中学生や高校生になると親の言うことを聞かなくなる。親の言うことに一々逆らい反抗するようになる。そんな状態を「親が西向きゃ子は東」と言う。

現代では親子の相克も口喧嘩程度で済むことが多いが、戦国時代には本気で親子が争うことも決して稀ではなかった。伊達政宗も武田信玄も父親を殺したり見殺しにしたりしている。

そんな戦国の世で「親が西向きゃ子は東」を巧みに利用したのが真田氏であった。関ヶ原の合戦時、父・真田昌幸は西軍に与し、長男の真田信之は東軍方に加わり、親子が東西

に分かれて戦った。親の昌幸は上田城に籠城して、西上する徳川秀忠3万8000人の軍を遮り関ヶ原に参陣させなかった。一方、子の信之は関ヶ原に参戦し大いなる武功を上げた。ところで、真田氏が東西に分かれたのは、決して仲が悪かったからではなかった。東西いずれの軍が勝っても、真田家が存続できるようにと丁半博打の丁と半の両方の目に張ったのである。真田氏の思惑は見事に当たり、関ヶ原の合戦後、真田家は存続を果たしている。

④親の意見と山吹の花は千に一つも実がならぬ（親の意見と茄子の花は千に一つも仇はない）

江戸城の築城者として知られる太田道灌は、歌道にも親しみ風流を解した武将として有名である。彼が文学に励む切っ掛けを作ったのが有名な「山吹の故事」である。ある時、狩りに出た道灌は急な豪雨に遭ってしまった。山中に一軒家を見つけた道灌は「蓑があれば分けて欲しい」と声を掛けた。すると、暫くして家の中から出て来た少女は、無言で山吹の花をそっと差し出したと言う。その時、道灌は少女が何を言いたいのか分からなかった。館に帰った道灌は、はたと思い付き、古歌集を紐解いてみた。そして後拾遺和歌集に兼明親王の以下の古歌を発見した。「七重八重 花は咲けども 山吹の みの一つだに 無きぞ悲しき」。少女は山吹の花を示すことによって「蓑」が無いことを伝えたかったのだと気が付いた道灌は、己の学の浅さを恥じ、その後は更に歌道に励んだと伝えられている。

山吹は山地に多く群生するバラ科の植物で実が成らないことで有名である。そこで、放蕩息子に親が幾ら意見しても無駄なことを「親の意見と山吹の花は千に一つも実がならぬ」と言うようになった。

〈カ行〉

①金は天下を回り道（金は天下の回り物）

金という物は、なかなか思うように自分の所には巡って来ないものである。そんな世の中を嘆いた諺が「金は天下を回り道」である。

②子はカスがいい（子はかすがいい）

親にとって我が子は、優秀であることが望ましい。しかし余りにも優秀過ぎて世界に雄飛してしまい、親元から物理的にも精神的にも離れて行ってしまうとしたら、それはそれで寂しいことである。

これに対して凡庸な子は、他に行き場がなく親元の近くに住み着くことが多い。したがって、つましい小市民的な幸せを望むのであれば、優秀な子よりも「子はカスがいい」。

〈サ行〉

①強いては事を仕損じる（急いては事を仕損じる）

1582年6月2日、明智光秀は本能寺を急襲し、主君織田信長を殺害した。なぜ光秀が叛逆したのかについては諸説あるが、光秀に対する信長の態度が厳しすぎたのが一因ではな

いかという説が有力である。信長は光秀に対して次々とノルマを課し、有能な光秀は次々とノルマを達成して行った。しかし厳しい信長は、ひとつのノルマを達成すると休む間もなく更に無理難題に近いノルマを課して行った。余りにも過酷な命令に応えられなくなった光秀は、遂にキレてしまい、叛逆するに至ったのではないかと思われる。

上司が部下に対してにせよ親が子に対してにせよ、余りにも無理なノルマを押し付けると結局はうまく行かない。「強いては事を仕損じる」である。

②すまじきものは人使い（すまじきものは宮仕え）

ヒトは3つのタイプに大別されると言う。「猫型」「犬型」「権勢症候群の犬型」の3つである。権勢症候群の犬とは飼い主に従順に従わない犬のことを言う。犬は元来群れをなして生きる動物であり群れの中での自分の位置をわきまえている動物である。したがって、通常は飼い主を自分より上位と認識し従順にこれに従うのが普通である。しかし、躰をきちんとせず甘やかして育てると、自分を飼い主より上位と誤解し飼い主に対して支配的な態度を取るようになる。そんな状態を権勢症候群の犬という。

ところで上司にとって、猫型、犬型、権勢症候群の犬型の内、どの部下が望ましいのであろうか。猫型の部下はゴーイングマイウェイである。上司の命令に表立って逆らうこともないが、余り熱心に従うこともしない。犬型の部下は序列に拘るので上司の命令には一応従順に従う。しかし創造性に欠け、自らで創意工夫はしない。権勢症候群の犬型の部下は、気が向けば意欲的に仕事に取り組むが、何やかやと逆らってくるので煩わしい。上司としては、どのタイプの部下も一長一短があり扱いが難しい。やはり「すまじきものは人使い」なのかも知れない。

③晴天の辟易（青天の霹靂）

人は、何日も雨が続くと、たまには晴れて欲しいものだと思い、何日も日照りが続くと、たまには雨が欲しいと願ったりする。そんな人間の気紛れさを「晴天の辟易」と言う。兼好法師は徒然草 137 段で「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見所多けれ」と述べている。何事も移ろい行くから良いのであって、好ましい事でも続き過ぎると却って辟易するものなのであろう。

〈夕行〉

①智に働けばとうが立つ、情に棹させば泣かされる、人を通せば窮屈だ（智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ）

良き結婚相手に巡り合うのは難しい。余りにも頭脳明晰で頭が良すぎると、釣り合いが取れる相手の中々見つからない。気が付いてみたら、とうが立っていたという事に成りかねない。

情が深いと、知り合っただけですぐに昵懇の仲に成り易い。しかし、相手の見定めが不十分な内に昵懇になり過ぎ、目が覚めて泣きを見ることも少なくない。

人を介してのお見合いは、相手の氏素性に関しての安心感はあるが、見合いした結果、意に沿わず、断りたいと思う時、間に立ってくれた人への義理で断りにくい事がある。

「智に働けばとうが立つ、情に棹させば泣かされる、人を通せば窮屈だ、とかく結婚は難しい」。

②時には金なり（時は金なり）

兼好法師は徒然草の18段で「人はおのれをつづましやかにし、奢りを退けて財を持たず、世をむさぼらんぞ、いみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり」と述べている。あくせくと金儲けばかり考えながら生きてはいけませんよと言う事である。

兼好はまた140段で「身死して財残る事は、智者のせざるところなり。我こそ得めなど言う者どもありて後に争いたる、様悪し」と書いている。余りに大金を残すと、遺産を巡って後に争いとなり見つともないよとも書いている訳である。

兼好の言う通りだと思う。しかし人生、どうしても急に金が必要になる時はある。そんな時の為に、ささやかな蓄えは持っておいた方が良いと思われる。「時には金なり」である。

〈ナ行〉

①情けは子の為にならず（情けは人の為にならず）

鳥はある程度雛が成長すると、親鳥が巣の前で餌をチラつかせ巣立ちを促すという。その結果、巣立ちに成功する幼鳥もあれば、うまく飛べずに地面に落下して死ぬものもいる。多くの草食動物は、生後しばらくは群れの庇護の下に暮らす。やがて群れが移動する時が来ると、自力で群れに付いて行けない子は放置されて、やがて死ぬこととなる。猫は生後の数週間母猫が狩りの仕方や身を守る術を教え込むが、一定期間が経つと、母猫は子に噛みついて追い出し、自立を促すという。

野生動物に比べ、ヒトは我が子に情けを掛け過ぎかも知れない。通常ヒトの子は20歳過ぎまで親の庇護の下に置かれる。成人すると大部分は自立するが、30歳を過ぎても40歳を過ぎても、まだ親元で巣籠もりしたままの子もいる。余りにも情けをかけ過ぎていると、却って自立の妨げになるのかも知れない。時として「情けは子の為にならず」である。

〈ハ行〉

①鼻なら団子（花より団子）

西洋では「クレオパトラの鼻がもう少し低かったなら、世界の歴史は変わっていただろう」と言われる。古来、西洋では、鼻は高い方が美人と見なされて来た。

これに対して日本では違っていた。今昔物語や宇治拾遺物語に池尾の禅智内供の鼻の話が出てくるが、これらの物語で高い鼻は、醜悪な物として描かれている。

源氏物語には数多の女性が登場する。その中で随一、不細工な女性として登場するのが未摘花であるが、彼女の容貌については以下のように記されている。「まあ見つともないと目に付いたのは鼻でございます。どうしてもそこに目が行ってしまいます。(中略)その鼻は驚くほど高くそして長く、先端が下に垂れ下がって赤く色付いているのが特に嫌だなあと思われました」。高過ぎる鼻は醜悪だと書かれているのである。古来、日本では美人顔として「引き目、鉤鼻、おちょぼ口」が良しとされて来た。鼻は、高い鼻よりも団子鼻

の方が良い、「鼻なら団子」と認識されて来たのである。

私は眼科医であるが、眼科の検査は医者と患者が鼻と鼻を突き合わせるようにして行うことが多い。以前、クリニックにヨーロッパ人の患者が来たことがあるが、その高い鼻が邪魔になって何とも検査がやりにくかった。その時も「鼻なら団子」としみじみ痛感させられた。

②冬来たりなば貼る唐辛子（冬来たりなば春遠からじ）

1812年夏、ナポレオンはロシア遠征を開始した。夏の間は戦況すこぶる良く9月にはモスクワまで制圧した。しかし、やがて厳しい冬がやって来た。経験したことがない厳しい寒さに、ナポレオン軍はすっかり戦意を喪失し全滅に近い状態で敗北した。1941年6月、ソ連に侵攻したドイツ軍もまた、極寒の冬の訪れとともに敗北して行った。

幕末、幕府は北からのロシアの侵入に備え東北諸藩に北海道警備を命じた。オホーツク海沿岸の警備を命じられたのは弘前藩だったが、体験したことがない極寒のため、冬の訪れとともに、ほぼ全員が凍死したと伝えられている。

ヒトは寒さには滅法弱い。寒い地方では昔、冬になると足の裏に唐辛子を貼り付ける風習があった。「冬来たりなば貼る唐辛子」である。唐辛子に含まれるカプサイシンという物質に末梢血管拡張作用があり、ポカポカと暖くなるのである。昨今でも、カプサイシン入りの「湯上がり足袋」なるものが通販などで売られている。

〈マ行〉

①孫にも遺書を（馬子にも衣装）

最近百歳を超えて長生きする人が増えて来ている。そんな方の場合、お子たちの方が先立っているケースも決して珍しくない。そんな場合、子供宛だけではなく孫宛にも遺書をしたためなければならぬ。そんな状況を「孫にも遺書を」と言う。

②まず下位より始めよ（まず隗より始めよ）

この世の中、理不尽な風潮が罷り通っている。上位の者が、まずは下の者に対して強制的に実行を強いる風潮である。会社では上司が、恐らく自分では達成できないであろう過酷なノルマを部下に押し付け発破を掛けている。学校では教師が、自らはだらしのないジャージ姿で登校しながら生徒には厳しい校則を押し付けている。家庭では親が、自らが卒業した学校より遥かに偏差値が高い学校を目指せと子を日々叱咤激励している。今の世の中、「まず下位より始めよ」という風潮が強過ぎる。本来は、まず上位の者が範を垂れるべきであろう。

③猛母参戦（孟母三遷）

気性の激しい母親は、子供同士の喧嘩に自らもついつい参戦し我が子の味方をしてしまう。これを「猛母参戦」と言う。猛母参戦すると、ママ友同士の仲も子供同士の仲も気まぐずくなり、結局、後々、子供が不利益を被ることになる。

〈ラ行〉

①隣家の放蕩（伝家の宝刀）

隣近所に放蕩息子が居た場合、その家の親から「更生させるには、どうしたら良いでしょうか」と相談を持ち掛けられることがある。そんな時には大抵「時間が経てば目覚めて立ち直りますよ。大丈夫ですよ」などと気休め的な楽観的な答えをして元気付けることが多い。人は他人の事だと冷静に判断することが出来、鷹揚に対応する事ができる。これを「隣家の放蕩」と言う。

しかし自分自身の事となると話は別である。鷹揚になど構えてはいられない。我が家の息子が放蕩息子になど成ろうものなら、朝から晩まで、目くじらを立てての大騒動となる。

②老婆は一日にしてならず（ローマは一日にして成らず）

昔の日本映画を見ると、往年の大女優の若かりし日に出逢うことができる。最近では老け役専門となった大女優も当たり前の話であるが、半世紀ほど前は輝くばかりの美しさであった。大女優の昔と今とを見比べた時「老婆は一日にしてならず」だなという事をしみじみと実感する。大女優の中には若い内に引退し、その後は世間との交流を断ってしまった人もいる。長い年月を経過して、やがて老婆に辿り着いた姿を世間に見せたくなくなったからであろうか。

著者略歴

武藤政春(むとうまさはる)

1947年、新潟県上越市に生まれ、3歳時に関東に転居。都立上野高校を卒業後、東京医科歯科大学に入学し、眼科医となる。数年の大学病院勤務を経て、埼玉県で眼科医院を開業。70歳で引退す。

著書

基礎眼科学(眼鏡光学出版)1982年

動物たちは何を見ている(泰流社)1994年

役に立たない目の話(近代文藝社)1996年

親が泣くとも子は巣立つ(講談社出版サービスセンター)2002年

(以上)